

ゆうかな女の子ラモーナ

クリアー作

松岡享子訳

ティーグリーン絵



933 Cleary, Beverly. (1916-)
(NDC)

ゆうかなな女の子ラモーナ クリアリー著

松岡享子訳

学習研究社

167p 図 22cm (ゆかいなヘンリーくん
シリーズ9)

原題: Ramona the brave.

■この本の内容に関する問合せ、製本上のミスなどありましたら、下記あてをお願いします。
文書は、東京都大田区上池台4-40-5 (〒145) 学研ユーザー・サービス部「児童図書係」
電話は、03(720)-1111 (大代表)

ゆかいなヘンリーくんシリーズ・9
ゆうかなな女の子ラモーナ

ベバリー・H・クリアリー著

訳者 松岡享子

発行人 渡部ひろし

編集人 石井和夫

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台四丁目四十番五号
振替東京八一四二九三〇

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

©1976

無断複写複製(コピー)を禁ず

5306

Printed in Japan * 定価はカバーに明記してあります。

ゆうかな女の子ラモーナ

ベバリイ=クリアリー作 アラン=ティーグリーン絵

松岡享子訳



学研



ゆうかんな女の子ラモーナ

もくじ

1 公園^{こうえん}のできごと

7

2 おかあさんのひみつ

23

3 うちにあいた穴^{あな}

37



4 一年生第一日
ねんせいだいにち

49

5 フクロウ事件
じけん

64

6 両親の夕べ
りょうしんゆう

83

7 まっくらがりにただひとり

104

8 わるいことばをいってやる！

122

9 おとうさんのすてきな女の子

143

RAMONA THE BRAVE
by Beverly Cleary
Original English edition published
by Morrow , New York
Copyright 1975
Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo



装丁デザイン

山口はるみ



RAMONA
THE BRAVE

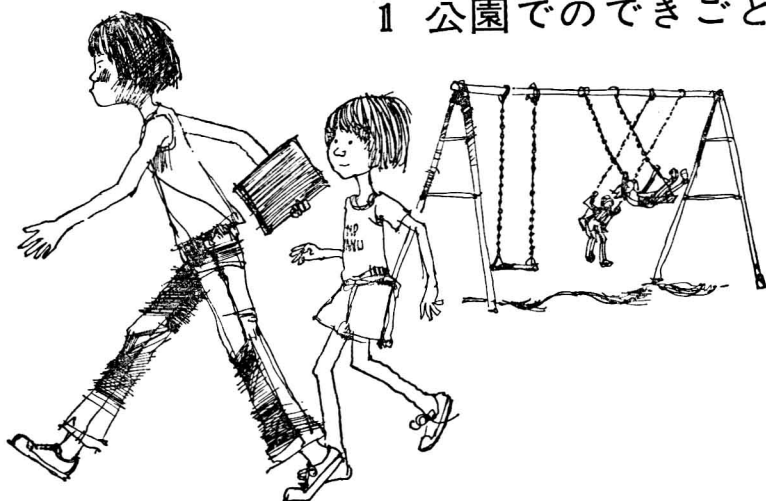
ゆうかな女の子ラモーナ

ベバリイクリアリー作

アランティイーグリーン絵

松岡享子訳

1 公園^{こうえん}でのできごと



ラモーナ「クインビー。勇敢^{ゆうかん}で、おそれをしらぬこの六さいの女^{おんな}の子は、今^{いま}、おねえさんのピアトリスにおくれまいとして、なかば走り、なかばスキップをしながら、公園^{こうえん}から家^{いえ}へ帰^{かえ}るところです。

八月^{がう}の午後^{ごご}の日^ひざしの中で、おねえさんのほおは、ラモーナがこれまでに見^みたこともないほど怒^{いか}りでまっかです。ラモーナ自身^{じしん}も、からだは汗^{あせ}でベトベト、おまけに、からだじゅう、すべり台^{だい}の下^{した}でついたおがくずだらけというありさまでしたが、でも、心^{こころ}は、ほこらしさでいっぱいでした。おかあさんが、ふたりに、一時間^{じかん}ほど公園^{こうえん}にいていらっしやい、そのまに、おかあさんにはしなればならないとても大事^{だいじ}な用^{よう}があるから、といったとき、おかあさんは、ビーザス（これは、

ビアトリスのことですが）に、ラモーナのめんどろをみてやってね、といったのです。

ところが、どうでしょう。めんどろをみてもらはずのラモーナが、反対にビーザスのめんどろをみたのです。こんなことは、ラモーナの六年間の人生で初めてのことでした。いつもはビーザスが世話をやく——というより、命令するといったほうがあたっている、とラモーナはときどき思いました——のに、それが、きょうは逆でした。ラモーナのほうが、一歩前へ出て、ビーザスをかばったのです。

「ねえ、ビーザス、もっとゆっくり歩いてよ。」と、ラモーナは息を切らしながらいました。

ビーザスは、汗ばんだ手に、図書館から借りた本をしっかりとぎりにぎりしめたまま、しらん顔をしてどんだん歩いていきます。自転車のベルの音や、アスファルトにあたる規則正しいテニスボールの音、子どもたちの叫び声などが、だんだん遠のいて、ふたりは、もうクリッキタット通りの、自分たちのうちの近くまでできていました。

ラモーナは、おかあさんが、なんの用だかしらないけれど、もうその大事な用をすませて、うちに帰っているといいなと思いました。公園であったこと、自分がおねえさんをかばったことを早く話したくてたまらなかったからです。それを聞いたら、おかあさんは、きつとラモーナのことを、えらいとはめてくれるにちがいありません。おとうさんも、おつとめから帰ってきたら、きつと同

じことをいうでしょう。「よくやったぞ、ラモーナ。たいしたもんだ。」って。勇敢なラモーナ。

うれしいことに、車庫には車があり、おかあさんは、ふたりが家の中にとびこんだとき、居間にいました。

「あら、ビーザス。」ふたりのむすめが、ひとりは怒りで、ひとりほこらしさで、ともに顔をまっかにし、汗をかべて立っているのを見て、おかあさんはいいました。

ビーザスは、あふれてくる涙をこらえようとして、目をしばたたきました。

「ラモーナ、ビーザスになにかあったの？」と、おかあさんがおどろいてきました。

「あたしのこと、今後いっさいビーザスっていわないでちょうだい！」と、ビーザスは、ものすごくけんまくだりました。

おかあさんは、これはいったいどういうことなの、というふうにラモーナを見ました。ラモーナは、わけを話したくてうずうずしていました。いつもなら、ラモーナになにが起こったかを、ビーザスが説明するのです。ラモーナが道にアイスクリームをおっことして、ビーザスが拾っちゃいけないといったら泣きだしたとか、ラモーナがきまりをやぶって、頭から先にすべり台をすべって、下のおがくずに顔をつつこんだとか、です。ところが、こんどは、ラモーナが、ビーザスになにが起こったか話す番なのです。ラモーナは、大きく息をすって、いきおいこんで話しはじめました。

「あのね、ふたりに公園^{こうえん}にいった、あたしは、はじめ、すべり台^{だい}ですべってたの。ビーザスは、ベンチにすわって、図書館^{としやかん}から借りてきた本^{ほん}読んでたわ。そしたら、ブランコがひとつあいたの。水^{みづ}あそび場^ばの上^{うへ}にある赤^{あか}ちゃん用のブランコじゃなくて、大きいほうのやつよ。それで、あたし、来^来月から一年生^{いちねんせい}だから、もう大きいブランコにのつてもいいと思^{おも}ったの。そうでしょ、ママ？」

「ええ、そりゃ……」おかあさんは、早^{はや}くその先^{さき}を聞^ききたがっているようでした。「それで、どうしたの？　ビーザスに、なにがあつたの？」

「それでね、あたし、ブランコにのつたの。」と、ラモーナはつづけました。「けど、ブランコの下^{した}んところは、土^{つち}がへっこんでて、足^{あし}がつかなかったのよ。」

ラモーナは、自分^{じぶん}が、そのとき、にぎりしめたくさがゆるみ、足^{あし}の先^{さき}がモミの木^きのてっぺんをさすまで、思^{おも}いっきりブランコをこぎたかつたことを思^{おも}いだしましたが、でも、そのことはとぼして、話^{はなし}を先^{さき}へすすめたほうがよさそうだと氣^きがつきました。でないと、おかあさんは、ビーザスに話^{はなし}をさせようとするかもしれません。せつかく自分^{じぶん}に番^{ばん}がまわってきたのに、それをひとにとられるのはいやでした。

「それで、あたし、いったの。『ビーザス、ちょっと押^おしてよ』って。そしたら、そこに、大^{おお}きい男^{おとこ}の子^こたちがいて——わるい子^こたちよ——、その子^こたちが、それ聞^きいて、その中^{なか}のひとりがい

の……」

話の先をつづけたのは山々ながら、あのことばを口にするのははばかりで、ラモーナは、ちよつともじもじしました。

「なんていったの？」おかあさんは、ふしぎそうにききました。「なんていったの、ラモーナ？　ビーザス、その子、なんていったの？」

ビーザスは、手の甲で涙をぬぐいました。

「その子ったら、あたしのこと、『ジー、ジー、ジ』」

自分が先に話したいという気もちが、ラモーナのためらいをうちましました。

「その子、ビーザスのこと『ジーザス（イエス・キリストのこと。英語の発音では、ジーザス・クライストという）』、ビーザス』っていったんだよ。」

ラモーナは、おかあさんを見あげました。おかあさんが、きつとひどくびっくりすると思つたのです。ところが、おかあさんは、なあんだ、そんなこと、といった顔をただけでした。そして、信じられないことでしたが、ちよつびりおかしそうな表情さえ見せたのです。

「だから、あたし、もうぜったいに、ぜったいぜったいぜったいに、あたしのこと、ビーザスってよんでもらいたくないのよ！」と、ビーザスがいました。

「そしたら、ほかの子も、みんないっしょになっていいだしたんだよ。」ラモーナは、この話のい

ちばんいいにくいところがすぎたので、いきおいづいていました。「そりゃ、ひどかったんだから。ほんとよ、ママ。ほんとに、ひどいんだから。あの子たち、ほんとにわるい子だよ！ 声をそろえて『ジーザス、ビーザス。ビーザス、ジーザス』って、いつまでもいつてき。だから、あたし、ブランコおりて、その子たちにいつてやったの……」

と、そこへ、ビーザスが口をはさみました。怒りが、今いちど涙にとつてかわったのです。

「そうなの。そこへ、たのみもしないのにラモーナがしゃしゃり出て、いったいどうしたと思う？ ブランコからとびおりて、お説教したのよ！ チビの妹がおしりにくつついてきて、男の子相手にお説教するなんて、はずかしいったらありやしない。それに、あの子たち、そんなに大きい子じゃないのよ。大きな子みたいなのふりしてるだけで……」

「……………」

ラモーナは、自分のあのとぎの行為が、こんなふうにうけとられていたのをしって、がくぜんとしました。せっかく自分が勇気をふるってしたことなのに、ビーザスときたらあんまりです。それに、あの男の子たちは、ラモーナには、たしかにとっても大きく見えました。

おかあさんは、まるでラモーナがそこにいないみたいに、ビーザスに話しかけました。

「お説教ですって？ うそでしょう。」



「ママ、あたしはね……」ラモーナは、なんとかわかってもらいたくて、もういちど口を開きました。

でも、ビーザスは、妹に口をきくチャンスをあたえようとはしませんでした。

「いいえ、うそじゃないわ。おまけに、ラモーナったら、そのあとで、親指を耳につっこんで、あとの指をふりながら、舌出したのよ。あたし、もうはずかしくって、はずかしくって、死にたいくらいだったわ。」

ラモーナは、急にしゅんとしました。今の今まで、ビーザスは、あの男の子たちのことをおこっているのだとばかり思っていたのに、話のようすからすると、自分のこともおこっているのです。もしかすると、自分のことのほうをよ

けいおこっているのかもしれませんが。ラモーナは、自分がうるさがられるのにはなれていました。自分でも、そう思われてもしかたがないと思うこともありましたが、でも、それとこれとはちがいます。

ラモーナは、自分が自分のわきに立って、自分を見ているような気がしました。そこにいるのは、ラモーナのしらない、六つになるへんな女の子です。ぴんとまつすぐな茶色の髪をして、よごれた半ズボンと、胸にナマヌ・キャンプと書いてあるビーザスのお下りのTシャツを着ているその女の子は、おねえさんがはずかしくてたまらなくなるようなへまをやる、ばかな子です。それなのに、自分では、自分のことを勇敢だと自慢していた子です。今になってわかりましたが、ラモーナは、ちっとも勇敢ではなかったのです。おっちょこちょいで、ひとに恥をかかせるような子なのです。ラモーナの自信は、ガタガタにくずれました。

「ママ、あたしは……」ラモーナは、もういちど口を開きかけました。

けれども、おかあさんは、この際ビーザスが第一と思っているらしく、ビーザスに、「その男の子たち、おまえのしってる子？」と、ききました。

「うん、まあ、」と、ビーザスは、はなをすすりながらいいました。「いっしょの学校だもの。こんど学校がはじまったら、六年の子は、みんないうわ。六年の男の子って、ほんとにいやなんだから。」

「それまでには、わすれるわよ。」と、おかあさんは、なぐさめるようにいいました。

ビーザスは、またはなをすりました。

「ママ、これから、ビーザスのこと、ビーザスっていうのやめようよ。」と、ラモーナはいいました。

ラモーナは、気もちは傷つけられ、自信はガタガタになっていましたが、それでも、このことでは、ビーザスの味方にならなければいけない特別の理由があったのです。だって、みんなが、ビーザスに、ビーザスなんていうかわった名前がどこからきたのかときくと、ビーザスはきまって、それはラモーナがつけたのだというのです。ラモーナが小さいとき、ビアトリスといえなくて、ビーザスといったからなのです。そのラモーナも、もうすぐ一年生です。自分がおねえさんの名前もちゃんとえなかったときがあったなどと思うといやでした。

「おばさんにひとりビアトリスがいるからって、どうしてあたしにまでそんな名前つけなきゃならなかったのよ。ビアトリスなんて名前の子、ほかにはひとりもないわ。」と、ビーザスがいいました。

「じゃ、みんなと同じ名前がいいっていうの？」と、おかあさんがききました。

「そうじゃないけど、でも、ビアトリスなんて……」と、ビーザスは口ごもりました。

「そうだよお。」ラモーナは、なんとかしてビーザスの肩をもとうとしていいました。でも、おか